

# 海に帰る日

高野敦志



生まれ生まれ生まれ生まれ生まれ  
に死んで死の終わりに冥し。  
(空海『秘蔵宝鑰』より)  
死に死に死

## 目次

海に帰る日  
あとがき

96 1

海に帰る日

高野敦志

トントコトントン、トコトコトコトコトントン、遠い昔から  
耳にしてきた音。過ぎた時に意識を立ち返らせてくれる音。せ  
き止め飴の店先で、まないた 俎をリズムミカルに叩いている。引き延ば  
された軟らかな飴が、見る見る包丁に刻まれていく……。

川崎大師平間寺へいげんじの参道に続く仲見世なみせには、老舗しにせの飴屋のほか、縁起担ぎと語呂合わせで名づけられた久寿餅くずもち、厄除けと開運をもたらすダルマを並べる店が連なる。ようやく訪れた春の暖かさに、英夫ひでおは時の流れがゆるやかになった気がした。屋台のラジオからは、完成した成田空港に過激派が乱入し、開港が延期されるニュースが流れていた。

戦災で焼けた後に移築された不動門を抜けると、英夫は八十過ぎの母が待つ実家へと急いだ。通勤に使っている灰色の背広姿で、ネクタイは外して鞆かばんに丸め込んでいる。勤める高校では教務主任をまかされていた。

車道の間には狭い路地が続く。色あせた屋根瓦に、波トタンを外壁にしたアパート、開店休業のたばこ屋。休みの日だという

のに、子どもの声が聞こえてくるのはまれで、老人が下駄を履いて出す音が、妙に甲高く聞こえてくる。ブロック塀べいに囲まれた中で、砂の山を動かすブルドーザーが息を潜めている。多摩川で砂利じやりが採取されていたのは、昭和三十年代ぐらいまでだった。この町はとうに成長を止めて、過去の記憶の中で命をつないでいる。

実家の玄関は路地に接していた。今では黒ずんで、「吉野勝藏かつぞう」という文字は読めない。日中戦争のさなか、英夫がまだ小学生のうちに死んだ父の表札を、戦災で家が焼けなかったお守りのように、母いとは外そうとしなかった。

横開きの戸が音を立てると、長兄の勇夫いさおが「英夫か」と呼ぶ

声がした。居間には一回り以上も年上で、眉毛まで白くなった無口な兄と、気丈でよくしゃべる兄嫁がいた。とめは何でもはつきり言うが、裏表のないさっぱりした性格である。兄が終戦時にシベリアへ抑留され、ようやく復員したものの、体調を崩して入院している時期があった。その時、病院で看護婦をしていたのがとめだった。だから、二人は英夫と妻淑子の場合とは違って、劇的な結ばれ方したのである。長兄にはもう就職した娘と、大学に通う息子がいたが、英夫にも高校に入ったばかりの息子貴志と、来年中学に上がる娘の美穂がいた。

実を言うと、英夫は勇夫のことが苦手だった。何か話しかけても、すぐ会話が途切れてしまう。それでいて、兄はこちらから話を続けるのを期待しているからだった。隙間を埋めるよう

に、とめがおしゃべりを始める。耐えきれなくなって、唐突に兄に問いかけた。

「母さんは？」

「行ってみるよ」

英夫は母いとの寝起きする部屋に入った。四畳半の狭い座敷に、和箆わだんすや本棚が置かれ、一人用の小さなお膳を前にした母は、緋かすりの着物をまとった後ろ姿で、ガラス窓の方を向いている。庭の路地に枝を伸ばす桜は、まだ蕾つぼみが膨らんだままだった。この木は父勝藏が富士郡伝法村でんぼうむらの自家の庭に生えていた

のを、南武鉄道<sup>三</sup>の技師として引越してきた時、殺風景な庭に植えたものである。昭和二十年四月の大空襲で、隣の区画まで焼け落ちたのに、葉桜が降りかかる火の粉からこの家を守ってくれたのである。

「母さん、今年の桜は咲くのが遅いね」

呼びかけに答えてくれないので、英夫は横に腰を下ろした。いとほ縝の着物姿で、お膳の前で正座していたが、疲れたのだろうか、眼鏡<sup>めがね</sup>を外しようとしていた。もう一度呼ぶと目を上上げたが、瞳は見えないものに操られている。お膳に手をつき

\*二現在のJＲ南武線

立ち上がると、敷いていた座蒲団を抱え込むようにして、襖<sup>ふすま</sup>の方<sup>かた</sup>に歩いて行こうとする。

「そろそろおいとましないと……」

「何言ってるんだ、今来たばかりなのに……。それに、母さんのうちはここじゃないか」

母の皴<sup>しわ</sup>だらけの手を取り、畳に座らせようとしたが、意固地になって言うことをきかない。「行ってみろよ」という兄勇夫の言葉の意味が、ようやく英夫にも飲み込めた。

いとは座蒲団を抱えたまま、右足を引きずるようにして玄関に出た。英夫は半<sup>なか</sup>ばあきらめ顔で、母の妄想にしばらく付き合おうことにした。路地の向かいにある砂屋は、ブルドーザーの排

土板に水がたまっている。数日間は仕事がなかったのだろう。高度成長前に建てられたアパートは、内風呂はなく、トイレも共用だというので、空き部屋になったままの所が多い。板塀の間から覗いた物干しには、老人の腰巻が干されている。

「母さんのうちはいったいどこにあるの？」

英夫は冗談めかした言い方で、いとに尋ねてみた。母も父と同じ富士郡の出身で、田子ノ浦もじのうらに面した元吉原村もとよしわらむらの郷士、近藤家の末娘として生まれた。名主なぬしを務めていた吉野の本家とは、歩いて行ける距離にあった。

\*三 現在の静岡県富士市南西部

ところが、いとの生まれた日清戦争の頃には、祖父は倉庫業で成功しており、名士として豊かな生活が送れるようになっていた。母も東京の家政学校の寄宿舎に移り、明治時代には恵まれた女学生として、古典の素養や和服の仕立てなどの技能を習得していた。武士の娘の生き残りのような、厳しさと優しさを兼ね備えた母だった。

「うちはすぐそこにあるだ。あの道の向こうに行けば、海が見えるだよ……」

母はその通りが東海道で、すすけた屋根瓦の一つが実家であると思っっているらしい。いと歩みが危なっかしいので、英夫は抱えていた座蒲団を取り上げ、腋わきにはさんだまま、大通りの横断歩道を手を引いて渡った。

道路は一直線に伸びており、まっすぐ行けば、大師線の線路とぶつかる。警報器の音がしてきた。いとは足を止めた。鈍い響きとともに、京急の赤い大柄な車両が、前方の通りを横切つていく。きつと目が覚めるはずだ、ここが故郷の浜辺ではなく、長年暮らした川崎の町であることに。

「聞こえないのかね、海の呼吸が。あそこが田子ノ浦だ。松林の向こうに砂浜が広がってる。きれいな海じゃないか」

ふいにいとは手を離すと、二・三步進んでいった。懐かしい友の姿を、はたと認めたように指さして言った。英夫は耳を疑つて、老いた母の顔に眺め入った。

「ほら、見えるじゃないか。松林の向こうに、夕陽を浴びて海が金色に輝いてる。私のうちは林の手前、大きな石垣がある家

だ。今夜はみんなで飯を食うだよ。九人兄弟はにぎやかだからよ。じいさまも待つてくれるって言うし……」

ここ十年近く、母が実家に戻っていないことを思い出した。じいさまというのは、明治の末に亡くなり、写真も残っていない曾祖父のことだろう。

英夫が最後に近藤家を訪れたのは、母の兄の三回忌の法事の時だった。囲炉裏と燻いぶされた引き戸のある、風格ある家にはもはや、母が暮らしていた頃の人は住んでいない。『万葉集』に詠まれた田子ノ浦だって、製紙工場から流れ出たヘドロでよどみ、空は排煙でいつも濁っている。懐かしい故郷なんて、とうに失われてしまったんだ。だったら、記憶の中だけにとどめておけばいい。

「母さん、もう帰ろう。ここには近藤のうちなんかいないんだから」

英夫がいつもの手を引いて、今の家に帰ろうとすると、母は電車の通り過ぎた踏切の辺りあたりを、目をこらして見つめている。母の表情は色を失っていた。微かな震えが伝わってきた。早く母を連れ帰ってしまいたくなくなった。しかし、すでに遅かったようである。

「みんな、みんな死んでしまっただ」

母は踏切に背を向けると、英夫の手を放して力なく、しかし決然と来た道に戻っていく。支えてあげたかったのだが、それをためらわせるものがあつた。何で素直に母の話に合わせてあげなかったんだろう？

晴れ上がった五月の週末のこと、英夫は多摩川の土手に出ていた。そよ風がスキの葉を揺らしている。日はすでに西に傾いていた。母いとが近所に買い物に出たまま、行方が分からなくなっていた。兄嫁のとめの話によると、家を出てからもう三時間は経っているとのこと。しかも、道に迷ってしまったのは、どうやら今日が初めてではないらしい。

京浜急行と国鉄\*四の鉄橋をくぐったところで、オレンジの車体に緑のラインが入った東海道本線の車両が、鈍い振動で鋼鉄

\*四 日本国有鉄道の略で、一九八七年(昭和六二)に、J R 7社に分割民営化された。

のトラスをうならせながら走ってきた。糞便の飛沫が飛んでくるのではないかと、英夫は思わず手で鼻と口を押さえた。

ふと、川面かわもの方に目をやると、一段低くなった河原の茂みに、終戦直後の掘っ立て小屋を思わせる、トタン屋根の錆びた家が建っていた。サツマイモの赤い蔓つると緑の葉が、耕して盛り上げた畑に伸びて、貪欲に覆い尽くそうとしている。鍬くわが投げ出されて、長いキセルの先にマッチで火をつけようとしていた。一服したところで、おもむろに英夫の方を見上げた。

英夫は土手の上から、一気に茂みの方に駆け下りていった。老人はキセルから口を離すと、紫煙しえんを心地よげに吐き出して、傾きかけた目を眺めている。もう戻ることのない祖国を思い出

しているのか。右足を引きずって歩く、緋の着物をまとったいとの姿を説明すると、一時間前にそれらしいばあさんを見かけたと話してくれた。

「何でも、海を見に行くんだ、海はどちらの方かねって訊きくん  
だ。だから、あっちだよって教えてやった……」

老人が指さす河口の方では、帰郷を諦あきらめたカモが数羽、水面で羽を休めていた。広がる川には海水も交じって、ほとんど流れを止めているように見える。次の瞬間、とどろくようなジェット音に驚いて、ふるさととは反対の南に向かって飛び立った。見るとかすんだ空を、羽田空港から旅客機が上昇していく。

「そうかい、あんたのおモニ<sup>\*五</sup>だったのかい」  
老人は感慨深げにつぶやくと、またキセルを白い髭<sup>ひげ</sup>の辺りに  
持って行った。親孝行なんだねと、独り言のように続けた。わ  
しは半島にオモニを置き去りにしてしまったからなあ。キセル  
の煙は老人の遅すぎる懺悔<sup>ざんげ</sup>を、追憶の懐かしさの中に包んでい  
た。

日は傾きかけていた。川面に波紋が立って、肌を逆なでする  
風が吹き出した。英夫は思わず身震いした。母は本当に海まで

\*五 朝鮮語で「母」を指す。

歩いて行ったのだろうか。たどり着く前に、日が暮れてしまう  
のではないか。土手の上で立ち止まった。先ほど老人と話した  
辺りの、鉄橋上に広がる空は赤みを帯びて、点灯した電車のシ  
ルエットが、音もなく鉄骨のトラスを通過していく。

多摩川に沿って進むと、右側は道路脇まで味の素の工場が迫  
っている。遠目にはきれいな見えた川の水も、よどんだ辺りに  
は、空き缶や発泡スチロール、菓子の包み紙が漂着していた。  
夕闇が迫ってきたために、モノトーンの写真のようにしか見え  
ない。少年時代に水遊びした面影はここにはない。

大師河原と呼ばれたこの周辺が、開発が進む以前の海岸線だ  
った。寂しい漁村があった遠浅の浜が、埋め立てられていった  
のは、いとが勝藏に嫁<sup>よめ</sup>いできた大正の初めからだ。母はこ

の町が工場地帯へと変遷しはじめる頃から、大空襲によって灰燼<sup>かいじん</sup>に帰しながらも、朝鮮戦争の特需景気で復興していくさまも見てきたことになる。母は街中をさまよいながら、いくつもの時代の集積である町の光景に、その時々<sup>とき</sup>の姿を目にしてきたのだろうか。

日は沈んでしまい、海側から押し寄せた夜が、埋立地の殺風景な空間を覆いつつあった。浮島町と呼ばれるこの辺りは、昔は川からの土砂が堆積<sup>たいせき</sup>した浮洲となっていた。

貨物線と平行した橋を渡り、直線の道を進んでいくと、巨大なタンクの群れが、闇の中から鈍い光をとまなび浮かび上がっている。バス停には工場を退勤した人たちが、口もきかずに

並んでいた。緋を着た八十過ぎのおばあさんを見かけなかったかと尋ねたが、仕事を終えたばかりの人は、首を振るばかりでまともに答えてくれない。

海を目指していたとなると、ここまで来てしまうだろうと思っただが、英夫にも確信があったわけではない。昼間は活気づく工場地帯も、操業時間が終わると電源を落とし、人影もまばらな一直線の道に、等間隔で並ぶ電柱が、未成熟な土地の眠らない標識となっていた。湿り気を帯びた空気が、海の方から流れてくる。道はやがて前方で途切れてしまい、先には暗い東京湾と、行き来する貨物船のほのかな光が浮かぶばかり。

夜遅くには無住地帯となる町は、住宅地や商業施設の明かりがない分暗く、実家ではほとんど見えない星も、郊外の夜空は

どに認められた。この無機的な光景を、英夫は何度も目にしてきた気がする。

「そうだ、夢の中に出てくるイメージだ。眠りながらも意識の一部は働いていて、アスファルトの路面を踏む靴の感触も、夜の冷やかな大気も感じられ、これは夢だと自覚しながらも、あまりの現実感に目を疑ってしまう、そんなイメージだった。

先端の公園に近づくと、木更津きさらづへ渡るカーフェリーの待合室が見えた。東京湾アクアラインはまだ、建設工事すら始まっていなかった。待合室の右隣のベンチに、結い上げた髪を鬘べっこう甲のくしで留めた、懐かしい着物が座っていた。英夫は思わず走り出し、海の側に回って老女の顔を確かめた。

「母さん、母さん、いったいどうして、黙ってこんな所まで来

てしまったんだよ」

気持ちが高ぶってしまい、まくし立てている自分を抑えられなかった。いととははっと目を見開くと、皺だらけの顔に笑みが広がり、口許くちもとからきれいに並んだ歯を覗かせた。自分が家族に心配をかけていたことなど、一向に眼中にないといった感じである。

「迎えに来てくれたのかい」

「そうだよ。黙って出てってしまうんだから……」

いととはよく聞こえないのか、耳を傾けるように何度かうなずくと、黒い海をゆったり進む細長い明かりに見とれている。照らされた周囲の海面が、白く波立つさまがうかがえる。昼間はかすんでいるはずの対岸も、夜の到来とともに、一筋の漁火いさりびの

ように浮かび上がっている。

「買い物に出たんだが、急に海が見たくなっただよ。でも、時間がかかってしまったね。着いたらもう日暮れで、打ち寄せる波も見えやしない。がっかりして座り込んでいたら、何だか船に明かりがともって、きれいになってきたじゃないか。沖に蛍みたいに見えるのは、何かね、漁でもしているのかね。空には星も見えてきたし、あそこに見えるのはすばるかい？」

母の好きな星といったら、『枕草子』に出てくる昂すばるくらいだった。六つの青い星が助け合って見えるから、六女だった母には、姉たちに守られていた幼い頃が思い出されるんだろう。『スバル』は啄木たくぼくも参加していたんだったね。東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる、だったかね」

「それは『一握いちあぐの砂』に入ってるんだよ」

文学について話すと、いとは目を輝かした。英夫も母を捜していたことなど忘れて、夢中になってしまっそうになる。こんな話をしている間は、母の記憶が曖昧になっていることが、嘘みたいに思えてしまう。それでも目の前に広がる黒い海が、川崎のものか、ふるさとの田子ノ浦なのかは、気にかけていないように見える。

いとはしばらく夜景に見とれていたが、ふと思いついたみたいに、顔を上げると英夫の方をまじまじと見る。蛍光灯の弱い光に照らされた母は、現実とは思えない、老いた美しさをたたえている。気恥ずかしくなって、顔を背けたくなった。

「どうしたんだい、母さん」

「お札を言わなくてはね。今までどうも有り難う」

何でそんなこと言うんだろう。英夫はおかしな気がして、素直にうなづくことができなかつた。でも、八十過ぎた母の身になれば、元気なうちに言っておきたいのも、分らないわけはない。

「生まれてくれなければ、おまえとも話ができなかったからね」  
母はうつむいて、続く言葉を探しているようだった。急にこわばった真剣なまなざしになる。つかまえようとしても、のたくる先がとらえられないのか。

「おまえは何でも知ってるから、一度訊いておきたいことがあるんだよ。何だったかね。そうだ、私は死んだら地獄に行くのかね、極楽ごくらくに行くのかね」

「そんなこと、訊かれても」と口を濁したが、母を不安にさせたくないのので、「悪いこと何にもしてないから極楽だろ」と答えた。

「そうかい、そりゃあよかった。私は防空壕みたいな所、二度と入りたくなかつただよ」

戦時中の空襲で逃げ惑った体験が、母の記憶に痣あざとなつて刻まれているのか。英夫は早く話を終わりにしたかつた。

「極楽ならお父さんや、雅夫まさおにも会えるわけだね。死んでからも別れ別れじゃ寂しいじゃないか」

年中どなり散らしていた父勝藏に、母はあの世で会いたいのだろうか。ニューギニアで戦死した次兄の雅夫は、口数の少ない長兄の勇夫と違って、英夫のことをよく気にかけてくれてい

た。雅夫は出征する日に、食い入るような笑顔で「母さんのこと頼む」と言っていた。二十代のまま、永遠に年を取らない兄の顔は、すでに英夫の記憶の中では薄らいでいる。

汽笛の音がした。英夫は目が覚めたような気がした。母は数歩前に進んで、今聞こえた音のみなもとを探している。草履が芝生を踏みつけている。冷ややかな風が吹いてきて、母は二度軽い咳をした。

「極楽はどこかね」

「寒くないかい？ 早く帰ろう」

いととは父親に問いかける少女のように、答えを聞くまではその場を動かこうとしない。英夫は困り果てて、思いついたままに、天を指さして言った。

「あの星だよ」

「そうかい、あの星ねえ」

不思議そうに首を傾けていたいととは、指さされた先に向かつて手を合わせている。あいにくそれは昴ではない。人は死ぬと星になるといふ話を聞いたことがある。でも、こうして見える星も、実は過去に輝いていた光を見ているんだな。

恐らく、目に見える星の大半は、この自分も、母でさえも生まれる前の姿であって、今この瞬間には、すでに燃え尽きてしまった星もあることだろう。いとは自身で気づかぬうちに、時のがらみから解き放たれ、虚空の海で自由を得ているようだった。合掌したままの母の姿を見て、極楽は母の心の中にあつて、いつかは自分も帰っていくんだらうと思つた。

梅雨が明けたばかりだった。日が落ちてもどこかの庭先で、アブラゼミが絶叫している。セミには耳がないんだろう。穴が開いてしまうほどのけたたましさなのだから。風もないので、気温は一向に下がりそうもない。慣れぬ暑さに老いた体は、いっそう応えているのではないか。

英夫は街灯のともった裏道を急いでいる。会議が終わって出勤する時に、妻の淑子から電話が入り、実家に急行しているところだった。川崎大師の駅を降りてからも、周囲に目を配る余裕はなかった。

砂屋の向かいにある引き戸を勢いよく開ける。兄の勇夫と義姉のとめが玄関に立っている。目が合うと、兄は目で挨拶してくれた。とめは「早く会ってあげてちょうだい」と小声で言った。居間の奥では早退した甥と姪が、神妙そうに座り込んでいて、目が合うと会釈してくれた。口許が引きつっているようで、姪の方はうつむいてしまった。

英夫は南側の庭に向いた部屋の前を開けた。普段は和簞笥や本棚に囲まれた中央に、古いお膳が置かれていて、緋を着た母が本を読んでいるのだが。今日は畳の上に蒲団が敷かれている。頭に氷枕をし、額に濡れたタオルをした母は、いつもより息が速くなって、呼吸もうなっているように聞こえる。吸吞で薬は飲ませているらしいが、ほとんど意識がないので、何か食べさせることはできない。そこで、看護婦の資格があるとめが、ブドウ糖を打って、とりあえず水分の補給と体力の低下を防いで

いるとのことだった。

枕元に正座した英夫は、ネクタイをゆるめると、額に載っているタオルに触れてみた。湯気が出そうなほど温まっている。氷水に浸<sup>ひた</sup>して絞り直し、額の上に押さえると、顔を覗き見るようにして、母さん、母さんと声をかけた。

いととは赤らんだ顔でうつすら目を開けたが、焦点は定まらず、どこも見えていないようだった。口も渴ききっているんだろう。吸吞を近づけて飲ませようとしたが、すぐにむせてしまい、苦しげに胸を膨らませている。

「体に麻痺があるみたいよ」

開いている戸口から、とめがこちらを覗いている。風邪をこじらせてしまつてね、脳血栓も併発しているとか。往診した杉

田医師の言葉を、つぶやくようにして伝えてくれた。

もしかすると、という考えが頭をよぎつたが、すぐにそれは打ち消した。前回、浮島町まで海を見に行った母は、どれだけふるさとの田子ノ浦を見たかったことだろう。それはどんな人間にとつても、共通する気持ちであるに違いない。この世に生を受けた者はすべて、海から、母なる海から生まれたのだから……。

そう言えば、自分が復員した時、母と再会したのも田子ノ浦の海だった。英夫は三十年余りも昔のことを思い出していた。

予科練よこけんに入隊したものの、戦地へ赴く前に終戦となったため、英夫は母が疎開していた生家せいけに近い、東海道本線の吉原駅に降り立ったのだった。

なぜ川崎ではなかったのか、それには事情があった。昭和二十年四月の大空襲で、川崎駅より東側はほとんど焼け落ちたが、吉野家がある一郭だけは、奇蹟的に延焼を免れることができた。その後も、国道では米軍機からの機銃掃射で、多くの市民が犠牲になっていた。命拾いをしたのだから、という生家からの勧めで帰郷していると、母は葉書で知らせてきたのだ。出征した

\*六 海軍飛行予科練習生の略称

二人の兄、勇夫と雅夫の生死はいまだ不明だったが、母が生きていることは大きな心の支えだった。

改札口を出ると、熱気をはらんだ雲が視界を白ませていた。風はなかった。いとが疎開している家は、街道筋に残る武家屋敷だった。敷地を取り囲む石垣は、遠目にもよく目についた。これからどうすればいいのか分からなかった。死ななくてもよくなったが、どう生きていけばよいのかは、誰も教えてくれそうになかった。

母の故郷の家並みが見えてきた。人々の声に誘われるままに、英夫はわざと脇道に入った。松林の先に初秋のまだ強い光を浴びた、田子ノ浦が広がっていた。波はのたりのたりと寄せていた。潮の匂いが鼻をくすぐった。掛け声とともに、人々は魚と

綱引きをしている。

「地引綱か……」

平和だな。こんなことしていても、狙い撃ちされないわけだから。少年時代のこと懐かしくなり、自分も参加してみたくなった。英夫は頼まれもしないのに、地引綱の後尾から綱を引いた。

「あつ、兵隊さんだ！」

綱にぶら下がった女の子が叫んだ。女たちや老いた漁師がこちらを向き、口々にご苦労さまでしたと言った。笑みが自然に口許に広がり、戦争が終わったのだと、英夫は改めて実感した。その中に顔が強張ったままの初老の女がいた。白髪が半ばを占めている。母だった。こちらをじっと見つめている。綱を引き

ながら、瞬まばたきしたら幻が消えてしまうのでは、と恐れてでもいるように。

地引綱の中には、鰻あじや鯖さばはまばらで、大半が鰯いわしだったが、のたうち回っている鱗は銀色に輝き、青い目は初めて見る地上におののいていた。筋肉が踊り狂っている感じだった。人々はわずかの金を払って、持ってきた籠かごに魚を入れると、逃げないように手ぬぐいをかけた。幼い子などは、籠の踊りに振り回されそうだった。

英夫は暴れる鯛たいを見つけると、睨みつける漁師の目も構わず尻尾しっぽをつかんだ。

「母さん、今日はごちそうが食べられるね」

英夫は漁師に紙幣をつかませた。母の顔の強張りも解けてい

った。抑えてきた思いを、一つ一つの声に込めるように言った。  
「生きて帰ってきたんだねえ」

元吉原村の郷士だった近藤家は、母いとどの兄が当主となつていた。食料事情が改善するまで、いとと英夫はここにいるように言われたが、川崎の家が焼け残っている上に、二人の息子の生死も不明であるため、一日も早く帰りたいと母は考えていた。川崎に戻る数日前、いとと英夫は屋敷の先、砂浜に続く松林へと足を運んだ。良く晴れて穏やかな初秋の日だった。光がいくらか勢いを失った分、空の青さには底なしの深みがあった。母は庭木の下に咲いた浜菊の束を手にしていた。花は小振りで、白い舌状花が黄色い筒状花を囲み、素朴な笑みで心を和ませて

くれた。

松林の中に入ると、空を覆う針状の葉が屋根となつて、地面にはまだら模様之光が下りていた。海から寄せてくる風は幹全体を揺らし、土の上にできた光の網を、絶え間なく瞬かせている。

ここからは海のざわめきも枝のおしやべりに紛れ、白く輝く砂の帯が松の枝と地面の間に伸びていた。異界の光のように神々しく見えた。すると、松林の下は何かということになるが、そこはこの世とあの世の境であり、一面に靈園が広がっていた。多くの墓石は苔むして、刻まれた文字を読むことができない。すでに自然の一部となっており、成仏したはずの御先祖様も、この世が懐かしくなると、この松林に戻ってきて、人には聞こ

えない声で語り合っているのではないか。

母は近藤家の墓石の前にしゃがんだ。英夫は松林の端へ小走りで行き、木桶に水を汲んできた。ここにはいとが五歳の時に死んだ父、小学校を卒業するまで可愛がつてくれた祖父、顔も知らない曾祖父と、先祖代々の人々が眠っているのだった。

「子供ン頃、寂しくなるとよくここに来ただよ。すると、不思議と気持ち落ち着くだ。この土地に生きてきた人ン声が、聞こえるからかもしれんけどな……」

英夫は若者らしく、母の迷信くさい言い草を笑った。いとはしゃがんだまま、首を曲げてこちらを見上げた。真面目だが少々むきになった顔をしている。

「おまえにはまだ分からんかもしれんけど。私はもう、父さんや母さんの死んだ年になってしまっただよ。人間年取ると、それほど死ぬのが怖くなくなってくる。人々の魂ン中から生まれて、またそこに戻っていくだけだから。生まれて死ぬってというのは、一人の人間が多くの魂と、離れたり一つになったりすることなんだよ」

母は松林の先に見える砂浜の光を、まぶしそうに目を細めて眺めている。老いることで、人は死と和解しようとするのだらうか。それとも、亡くなった人々の声に耳を傾けることで、失われた命との一体感を取り戻そうとしているのか。二人の息子が戦死したかとも思い、心の準備をしているのかもしれない。英夫は目の端がうるんできた。

後日分かったことだが、英夫の次兄雅夫は、その頃すでに二

ユーギニアで戦死していた。昭和十九年、クリスマスの晩に逝ったことが、せめてもの慰めだった。

「母さん、もう一度、田子ノ浦のうちに帰ろう。そのためにも、元気になって……」

英夫が声をかけたが、急に胸を締めつけられる気がして苦しくなった。涙が出てきそうになって、縁起でもないことだと必死にこらえた。いとはうつすらと目を開けている。もう瞬きする力もないのだろうか。見ているのか、ただ<sup>まぶた</sup>瞼の開いた隙間から、英夫の方をぼんやり眺めているようでもある。声を出す力はなくなっている、耳だけは働いているというから、話かけるだけでも、母を呼び戻すことができるかもしれない。

部屋の中は薄暗くなっていた。いきなり蛍光灯がついた。振り返ると、往診の医師が立っていた。英夫は小声で挨拶すると、初老の医師は黒いカバンから聴診器を取り出した。いつの間にか、白衣に着替えた兄嫁がいた。とめは近所の開業医、杉田医院で非常勤の看護婦として働いていたのである。

杉田医師は黒い眼鏡越しに、冷静なまなざしで母の鼓動を聴いている。はだけた皺だらけの胸が、熱で赤みを帯びている。医師はとめに指示して、ブドウ糖を注射させた。母の体温は三九度二分。八半ばの老人には、体力的には厳しいはずである。「心臓がだいぶ弱っていますね。もしかすると、今夜が山かもしれない」

開いていた戸から、いつの間にか兄の勇夫や、甥や姪も入っ

てきていた。医師の落ち着いた物言いが、非情な宣告のように響いたが、下手に安心させるようなことを言うと、誤診だと訴えられる恐れがあるからだろう。

とめはいったん部屋を出で、氷水にタオルを浸した洗面器を持ってきた。しぼったタオルで軽く顔を拭くと、もう一度浸して絞り直し、いとの額の上にたたんで置いた。

医師は周囲にいる家族を眺め渡すと、宗教家が言うような口振りで言った。

「おばあさんは幸せだよ。こうして家族に見守られているんだから」

その言葉を聞いた時、英夫は復員する前に、自分が母に見守

られていたことを思い出した。大東亜戦争<sup>\*七</sup>の末期、英夫は予科練に志願しようと考えた。鉄道技師だった父勝藏は、真珠湾攻撃の前年には、すでに病死していた。リユーマチを患っていたため、痛みでいつも顔をしかめており、寝床から母いとを怒鳴りつけていた。

長兄の勇夫は応<sup>おうしやう</sup>召して北支<sup>ペ</sup>で戦い、次兄の雅夫はニューギニアに送られていた。三人の息子のうち、母いとへの許<sup>もと</sup>に残ったのは、三男の英夫だけだった。その自分が予科練に入れば、

\*七 太平洋戦争の旧称

\*八 中国北部の旧称

母は一人つきりになってしまふ。

本土空襲はまだ始まっていなかったが、昭和十八年五月には、アツツ島の守備隊が玉砕していた<sup>\*九</sup>。軍国少年として育った英夫は、二人の兄に続いて日本防衛のために、命を捧げたいと思ふようになっていた。母にはなかなか言い出せず、無断で志願してしまったことをわびる間、いとは黙ってこちらの目を見ていた。

英夫が顔を上げると、母は感情を押し殺しているのか、すぐ

\*九 アラスカ州アリューシャン列島に属するアツツ島を占領した日本軍は、再上陸したアメリカ軍との激戦の末、二五〇〇名の守備隊の大半が戦死、および自決した。

に答えようとしなかった。やりきれない思いが英夫を襲っていた。唇を噛んでこらえていると、いとはたしなめる口調で言った。

「おまえが決めたンなら、しっかり務めてらっしゃい」

本心では予科練に行くことに、母は反対だったのではないか。母はそのまま口を閉ざしたが、動揺の色は見せなかった。英夫は強がっていた気持ち揺らぎ、自分の眼が濡れてきそうになるのを感じた。母はどうしたの？ と問いかけて英夫の肩に手を置いた。掌から温かみが伝わってきた。英夫は自身を励まして、目尻に浮かんだ涙を袖で拭き取った。

英夫が予科練に入隊するため出発したのは、昭和十九年三月

末のことだった。その日は雨こそ降り出さなかったが、春の穏やかな日射しは注いでこなかった。旧制神奈川工業を中退しての入隊だったので、自分は先に学校へ出向き、校長や教頭、担任の教師に挨拶することになっていた。

「横浜駅に見送りに行くからね」

母いとが玄関先で手を振った。英夫は振り返ったものの、気恥ずかしい思いがして、まともに顔を見ずに、はい、とだけ答えた。勇ましい気持ちにはならず、不安ばかりが胸を締めつけていた。二人の兄もこんな気持ちで家を出たのだろうか。自分の心中を読まれた気がして、わざと胸を張って歩くことにした。

その日は川崎駅まで徒歩で行った。商店街は売る物がなくなり、配給の日を除けば、開店休業のありさまだった。空襲によ

る爆風に備えて、窓ガラスにはテープが貼られ、防火用水のバケツは供出されて、木の桶が逆さに積まれていた。店の主人の多くは召集され、子供たちは学校で習うより、工場で勤労奉仕にいそしんでいた。

生まれ育ったこの町も、もしかすると見納めになるかもしれない。板塀から枝を伸ばした桜は、まだ咲きそめたばかりだった。花を見る贅沢ぜいたくぐらいは許してもらいたかった。こんな陰鬱いんうつな日々がいつまで続くんだろう？

町の表情には生気がなかった。過去の記憶しか持たず、消えた世界に思いを馳はせる老人の顔をしている。本土決戦を待たずして、この町も、ここに住む人たちも、地上から失せてしまうのではないか。この国が滅びに向かっている気がして、軍歌を

口ずさもうとしたが、胸がつかえて声にならなかつた。

学校で挨拶を終えると、級友の多くが、横浜駅までついてきた。東海道本線の歩廊<sup>キナ</sup>は、予科練に入隊する他校の生徒で、身動きも自由にできない有様だった。景気をつけようと、太太鼓が鳴らされ、ラツパの先導で「若い血潮の予科練の」で始まる「若鷺<sup>わかわし</sup>の歌」が、青年の荒削りな音程外れの合唱で響いた。にぎやかさは途轍<sup>とてつ</sup>もなく、若い力で苦境に陥っている戦況を、ひっくり返してやろうという意気がみなぎり、入線してきた汽車も、あふれた人を恐れるようにそろそろと進み、ベルの音も

\*十 プラットホームの旧称

太鼓の音に打ち消されていた。戦時下では音<sup>おんぎよく</sup>曲を慎むように通達されていたから、入隊する者を見送る時だけは、堂々とお祭り騒ぎをすることができた。

英夫は出発する時間が気になった。機関車の煙が目に入ってきて、涙が出そうになったが、勘違いされては困ると、瞬きをしてこらえた。母はすでに来ているはずなのだが、ごった返す人の波に目が溺れてしまいそうだった。このまま顔を見ずに出発してしまうのか。もしかすると、もう二度と会えないかもしれないのに。これだけの人が集まっているということは、予科練に入隊する仲間、横浜周辺だけでもかなりの数となるのだろう。もう戻れないところまで来てしまった。それも自分が選んだ道なのだから。

鼓舞しようとする太鼓の音は、ますます大きくなった。

「おい、吉野、もう列車が発発するぞ」

あきらめかけて、最後に歩廊を振り返った時、日の丸を掲げて万歳を繰り返す人のうねりの中で、黙ってこちらを向いている母の姿を見つけた。隣組の主婦と一緒に、割烹着かっぽうぎをまとい、日の丸の小旗を手にしていたが、その手は力なく、肩の上辺りまでしか上がらなかった。

英夫はここにいることを知らせてくれて、母さんと声を上げたくなつたが、後ろから押されてままならなかった。たまたま窓側の席を見つけて、すかさず座り込むと、窓ガラスから先ほど母がいた辺りを探した。

汽車が走り出すと、煙が車内に入り込んできた。正面に座つ

ていた軍人に、窓閉めろと怒鳴られた。謝つてあわてて閉めたが、母の姿はかすんで、ぼんやりとしか見えなかった。どんな顔をしているんだろう。汽車が真横を通過する時、やっと母の顔が見えた。不安そうに気遣つており、日の丸はもはや動きを止めていた。

窓越しに英夫は手を振った。気づいたのだろうか。母は無言のまま、うなずいている。声を出すことなく、心の中で「行つてきます」と言った。歩廊が後ろに流れていく。いとこの姿はまた、無数の万歳と日の丸の渦の中に呑み込まれた。

神中線<sup>じんちゆうせん</sup>が右折する辺りで、機関車の煙で窓の外が見えなくなつた。奈良海軍航空隊予科練教育航空隊と、英夫は配属先となる長い名前を、かろうじて思い出すことができた。

英夫はいつしか居眠りしていた。兄嫁のとめが背中に、毛布をかけてくれたのも気づいていたが。母が苦しげに息をしているのも、聞こえていた気がする。もしかすると、母との別れが迫っているかもしれない。最期の瞬間<sup>さいご</sup>までそばにいてあげたいと思ひながら、まともに見るのが恐ろしくてならないのだ。

\*十一 現在の相模鉄道本線

英夫は夢の中でも、いとこの枕元に座っていた。母さんと声をかけたが、意識が朦朧<sup>もうろう</sup>としているのか、開きかけた目は宙をさまよっている。何か楽しい話でもしてあげたい、と思つた。

母さんは何がしたかったの？ そうだ、田子ノ浦の生家に戻りたかつたんだよね。元氣になつたら、一緒についていってあげるよ。

瞬きをやめたような母の眼を見つめて、英夫は魂を呼び戻そうとする真剣さで、声にならない声で語りかけた。松林を抜けて砂浜に出たら、知り合いの漁師に舟に乗せてもらおう。海の上から雪をかぶつた富士を拝もう！

母は意識が戻つたのか、瞼を大きく開いていた。首が動かせないらしいので、脇から覗き込むようにした。ほら、母さん、

あれが富士の山すそだよ。何て大ききなんだろう。川崎から見えるのは大違いだね。松林の陰から見え隠れしているの、あれが母さんの生まれたうちだよ。

いととは涙を流していた。流れ落ちるものを、そつとハンカチで拭いてあげた。人間は生まれてから、いろいろな経験をして年を重ねていくけれど、最後は生まれた所に帰っていくんだなあ。どんな生き方をして、戻るべき場所は決まっているんだ、子供の頃の素直さに……。

俺のことが分かる？ と英夫は訊いてみた。いとはまだ遠い世界を眺めているのだったが、微かに顎あごを動かしてうなずいたように見えた、というより、見えたと思いたかった。

母の息が静かになった気がした。夢うつつの状態で、英夫は

奇妙な安らぎに浸されていた。苦しみの源みなもとから解き放たれて、心と心がじかに触れ合っているような。このまま流れていく時間は、止めたければいつでも止められる。そんな気がした。胸元までかけられていた毛布は、呼吸に合わせて浮沈を繰り返していたはずだが、すでに微動さえしていなかった。

「お母さん！ お母さん！」

誰かが呼んでいる。寝間着姿のとめだった。英夫は目をこすった。窓の外は白みがかっていた。兄嫁はいとの脈を確認した。

「何だ、何だ」

とめの叫び声を聞いて、兄の勇夫が駆け込んできた。見上げたための目が潤んでいるのを見て、兄は力なくその場に腰を下ろした。

「楽に逝けたみたいだな」

勇夫の顔は緊張して、強張ったまま動こうとしない。英夫は呆気にとられて、まだ自分が夢の中にいるような気がした。立ち上がって窓を開け放つと、アブラゼミがけたたましく鳴いている。似つかわしくない現実が、殴り込んできたかのように、普段と変わらぬ朝の訪れを告げている。余りの騒がしさに、神経が麻痺してしまいそうになる。

すっかり風も凪いでしまい、軒先の風鈴もけだるげにぶら下がっている。真夏の強い日射しが庭木やブロック塀を覆い、夜が明けてもいまだ夢を見ているような、現実感の喪失を引き起こしている。アブラゼミが鳴きやむと、兄嫁と姪が台所ですす

り泣く声が聞こえてきた。

妻の淑子にはすでに電話して、通夜のための喪服を持ってきてもらうことにした。職場にも連絡して、校長から一週間の忌引が与えられた。ただ、夕方になるまで時間をつぶさなければならぬ。いったん意識が戻ったように感じたことから、祈りが通じて助かるのではないかとも思ったのだが……。

いとこの顔には白い布がかぶせられている。午前九時の開院前に、杉田医師が来て、死亡診断書を作ってくれることになっていた。兄の勇夫ととめは、葬儀の手はずについて話し合っている。

兄嫁が白いお握りを作ってくれていた。母の枕元には、もう口にすることはないが、英夫が食べるのと同じ大きさの物が置

かかっている。すでに冷たくなった米は、塩気が効いていたし、粘りけがあつておいしいはずだった。舌ではうまいと感じても、頭では味の無い糊を食べているような気がした。

英夫は予科練に志願して、死を覚悟した時期から、死とは何かについて考えてきた。復員して川崎に戻つてきた頃、示唆的しさくに感じられる出来事があつた。母が寝てしまつたあと、風呂に入つて居眠りしていると、不思議な感覚に浸されていつた。眠つていたなら意識はないはずだが、脳の一部は働いていたのだろうか。すべて満たされているという感覚で、遠い過去から未来に至るまで、あらゆることを熟知している気がした。

目が覚めた瞬間、冷めた湯の中で身を震わせていた。人間は長い歴史の中で、ほんの一瞬を生かされているに過ぎない。自

分の命が尽きた後、途方もなく長い時間が流れていく。しかも、再び目覚めることなく。それが死なのか。無限に続く闇の一瞬の光が、与えられた生の時間であるのだ。

永遠に消滅してしまうことは、知能を持った人間には耐えがたい。死の恐怖から逃れるために、残された手立てはあるのか？ 死を見つめないこと。現実の中に溺れ、愛欲の中に逃避する。しかし、死が近づいた老人には、この世の喜びなど、何の役に立つというのか。死の恐怖から逃れるために、人間は宗教を創造したのだろうか、死の瞬間というものは、毎晩眠るのと大して変わらない？

英夫は恐る恐る、いと顔に覆われた布を外してみた。蒲団に横たわつた母の顔は、昨夜とほとんど異ならない、息をして

いないことを除いては。静かに瞼を閉じている。皺に刻まれてきた母の年輪。唇を心持ち開いている。苦しみから解放されたためか、微笑しているようにも見える。臨終が大切だと言われるのは、死によって時間が停止し、最期の意識が永遠に続くからかもしれない。だとしたら、死に顔が安らかなのは、母が時間の流れぬ光の世界、いわゆる極楽に旅立ったことを意味するのだろうか。

母さん、と英夫は呼んでみた。いととは変わらぬ微笑みの中にとどまっている。母はもう苦しむことはないが、英夫の声に応じることもない。沈黙がとこしえに続いていく。母と語り合えるのは、もはや思い出の中ではない。母が旅立った日のこの顔を、生きている限り脳裏に焼きつけておこうと、英夫は思っ

た。

いととの葬儀を自宅で終えて、吉野家の人々はマイクロバスで火葬場に来た。英夫は待合室の畳にあぐらをかいて、兄勇夫と差し向かいでビールを飲んでた。落花生を噛み砕きながら、空きっ腹に流し込んでいたおかげで、ふさいでいた気分もいくらか楽になった。英夫の娘、中学に入ったばかりの美穂も、今は泣き顔を晴らして、いとこたちと学校の話などに興じている。息子の貴志は、高校生のくせにビールをお代わりしようとして、淑子にきびしく咎められていた。

「貴志も俺と同じ呑兵衛か」

兄と苦笑しながら、煙草をくわえてライターで点火した時、

脳裏に先ほど見た光景がよみがえった。火葬場の炉が開かれると、中は燃えさかるうなりが渦巻いていた。すべてを呑み込む恐ろしい火だ。母いとこの棺が中に送り込まれ、扉が閉じられると、短い読経しよきやうの後にこの部屋に移ってきたのだった。

目尻のうるみも乾いて、気分を切り替えて談笑していた。母が焼かれていることを思うと、居たたまれなくなるので、ビールをおおって考えまいとした。

「兄貴、どうして黙っているんだ」

勇夫は英夫より十以上も年上で、北支の最前線で戦って、ソビエト軍によりシベリアに抑留された。生死をさまよった体験は、内地で終戦を迎えた自分とは、比べものにならないほど過酷だったはずだ。兄も今や六十半ばで白髪も薄くなり、退職し

てからは口数がめっきり減っていた。兄はきつと遠からぬ日に、今日のように見送られることを考えているんだろう。目と目が合うと、口許に笑みが広がっていく。

「おまえだって黙ってるじゃないか」

兄は長らく見せなかった、人なつっこい表情を見せ、ビールを注いでくれた。

母さんが元気なうちに、田子ノ浦の家に連れてってやればよかったと勇夫が言うので、同じことを考えていたんだと、英夫はちよっぴりうれしくなった。できることなら、母の遺骨は吉野家の菩提寺ぼだいじではなく、松林に囲まれた、先祖代々のふるさとに埋めてあげたかった。

「兄貴、兄貴は母さんが幸せだったと思うかい？」

英夫が問いかけると、兄の表情から笑みが消えた。気難しげに目を細めて、じつとこちらを睨んでいる。

「おまえ、そんなこと口にするもんじゃやない。幸せだったと思えば、母さんは幸せなんだよ。母さんはもはや、俺たちの心の中にしか住んでいないんだから」

準備ができましたと、火葬場の職員が呼びにきた。英夫は大きく息を吸った。これから目にするものは、すでに生前のいとの姿をとどめていない。白いテーブルの上に、それは寝姿のまま載せられていた。母の肉体はもはや、どこにも存在しないんだなと実感した。兄の勇夫と箸で、母の腕だったらしい骨を挟んだ。幼い頃、俺を抱いてくれた腕の。身内に骨を拾わせるというのは、諦めさせるためなんだな。仏の教えというものは、

ショックを与えることで、心に区切りをつけさせてくれるんだ。

英夫は壺の中に骨を収めると、勇夫と行列の手はずについて話し合った。喪主である兄が戒名かいみょうの書かれた位牌いはいを持ち、骨壺は英夫が持つことになった。白磁の壺は白木の箱に収められた。胸に抱えられるほど、母は小さくなってしまったんだな。幼い頃に抱いてくれたのとは反対に、今日は俺が胸の中に抱くわけか……。

職員から骨壺の箱を受け取ると、英夫は兄の後ろに従って、火葬場へ送ってきた車に向かって歩き出した。妻の淑子や子供たちは、ずっと後ろに並んでいた。箱の中の壺はまだほんのり温かかった。骨にまでなっても、優しい気遣いをしてくれるのかと、英夫は胸のつかえがおりていく気がした。

記憶はさらにさかのぼっていった……。あれは英夫が小学五年を修了した春休みだった。ラジオをつけると決まって聞こえてくるのは、「紀元は二千六百年」を祝う歌声だった<sup>十一</sup>。大日本帝国は欧米列強から、アジア諸国を解放するために、聖なる戦いをしています。新聞やラジオが流すニュースを疑う心など、小学生の英夫に生じるはずもなかった。男の子の遊びといったらチャンバラで、憧れの対象は兵隊さんだった。それは五十半ばの父勝藏も例外ではなく、吉野家の流儀はすべて軍隊調だった。

\*十二 皇紀二六〇〇年は昭和一五年で、西暦一九四〇年に当たる。

た。

ローマ数字の柱時計が朝六時を告げると、父は「起きろ！」と大声で号令をかける。十歳近く年下の母は台所に立ち、飯を炊いて味噌汁の具材を俎で切っている。父の掛け声に、勇夫・雅夫・英夫の三兄弟は、すぐさま飛び起きて蒲団をたたむと、宮城<sup>十三</sup>に向かって最敬礼し、次に正座して、父に向かって朝の挨拶をしなければならなかった。一番年下の英夫は、冬の寒い日などなかなか蒲団から出られず、兄雅夫に促されて目をこすっていると、不自由な足を引きずった父が近づいてきて、

\*十三 皇居の旧称

「バカモン！」の一喝いっかつとともに平手打ちが待っていた。

父勝藏はリユーマチが悪化して、鉄道技師の職をすでに退いていた。病やまいがちだったのと、自分の自由にならない体への怒りが、つねに家族へと向けられていた。五十半ばの父は、老人のように髪が薄くなり、鬢びんには白い物が混じっていた。兄勇夫に似て口数は少ない方だったが、自分の意にそぐわないことがあると、突然荒々しい声を上げた。

父と母がなぜ結婚したのか、英夫にはまったく理解できなかった。新聞と工学の本くらいしか読まず、短気で何かと怒鳴り散らす父と、女学校から家政学校まで進み、古典の素養や和裁の腕もあり、もの静かで優しい母がどうして夫婦になったのか。

吉野家と母の実家、近藤家は、数代前から婚姻を繰り返して

いた。血が濃くなって、ほとんど同じ一族のようだった。唯一の目的というのは、両家の財産を分散させないということ、母は家のために吉野に嫁がされたというわけだった。

三月も末になり、吉野家の桜も蕾が膨らんできていた。長兄の勇夫はすでに出征が決まっていた。次兄の雅夫は旧制中学だったから、春休みに入っても、野球部の練習で登校する日が多かった。家にいるのは父勝藏と、母のいと、それにまだ小学生の英夫だった。

英夫は兄雅夫のように進学したかったのだが、父は息子を二人も、中学に進学させる気はない様子だった。

「いとのように、本ばかり読んでいると、お前は社会で生きていけないぞ」

勝藏は工業学校ならという条件で、ようやく進学を認められた。どうやら父は、英夫を自身と同じように、鉄道技師にさせたいらしかった。

「俺の言うとおりにすればいい。仕事も俺が南武鉄道の上司に口きいてやるから」

午前中は兄雅夫の机を借りて勉強し、お昼ご飯を終えると、近所の友達と野球をしたくなつた。チャンバラが子供っぽく感じられて、兄雅夫から少しずつ、教えてもらっていたからである。

出かけようとする、父が寝ている南の部屋から声がした。

英夫はいやな予感がして、ぴくっと震えた。しかし、すぐに返事しないと、父は機嫌を損ねてしまう。

小走りで日の差し入る部屋に入り、寝ている父の枕元に正座した。父は英夫に体を起こしてくれと言った。英夫は身を乗り出すように、父の左肩に手を差し伸べた。その時、膝が蒲団の上に乗ったのだが、下にはリューマチに冒された足があった。

「バカモン！」

父は痛みにこらえながらも、出せる限りの力で英夫の頭を叩いた。英夫は恐怖におののいていた。いつもなら、母いとが助けに来てくれるのだが。

勝藏は額に皺の寄った顔をしかめて、英夫の方を睨んでいる。何と答えたら良いか分からず、目尻から涙があふれてくるのを感じた。

「泣く奴があるか！ 男が泣くのは、親が死んだ時ぐらいにし

る」

英夫は泣くことさえ許されない。早く将棋盤を持ってこいと父は命じた。また相手をさせられるのだ。今向かい合えるのは、英夫しかいないのだから。

起き上がった勝藏は、脇息きょうそく<sup>\*十四</sup>に寄りかかって老眼鏡をかけると、無言で将棋の駒を並べ始めた。英夫はどこに置けばいいのか、父の駒を盗み見るようにしたが、上目遣いで睨まれている気がして、体が震えそうになってしまふ。父は将棋の規則について説明する時にかぎって、小声で事務的な指示をするみた

\*十四 ひじ掛けのこと。

いに言う。

「分かったか」と言われたら、「分かりません」という答えは許されない。

飛車ひしやと角行かくぎようのどちらが左に来るか？ 飛車を左に置いたら、父は無言で右に置き直した。英夫は駒の動かし方もうろ覚えだった。だから、一番単純な「歩ふ」ばかり動かしていた。すると、勝藏は桂馬けいまを進めて、英夫の歩を取った。桂馬の動かし方が分かったので、斜め前に桂馬を動かすと、父は香車きやうしやを進めて英夫の桂馬を取ってしまった。

父の表情が陰しくなってきた。英夫の指が動かないので、勝藏は咳払いをして英夫の銀将を動かして、自身の「歩」を取らせた。英夫は何が何だか分からなくなってしまい、立て続けに

「歩」を動かした。「いいのか、それでいいのか」という父の  
声は耳に入っても、何を意味するのか分からなかった。

次の瞬間、父は「王手」と言った。英夫はわけも分からず、  
王将を後ろに下げた。敵陣に入って「と金」なった「歩」が、  
英夫の王将を取ってしまった。

「バカモーン！ 何でおまえはそんなに弱いんだ。『と金』は  
二等兵が一等兵になったようなものだぞ。そんな歩兵に大将が  
討たれてしまった。真剣さが足りないんだ。将棋は単なる遊戯  
ではない。戦いくさをするための訓練だ。それとも、おまえは俺を  
バカにしているのか！」

英夫は縮み上がってしまい、土下座でもするように、畳の上  
に頭を擦りつけて震えている。騒ぎを聞きつけたのか、帰宅し

たばかりの母が、割烹着姿で玄関から小走りで駆けてきた。英  
夫の横に正座すると、わけも分からず、とにかく勝藏の怒りを鎮しず  
めようと、一緒になって頭を下げている。ようやく、勝藏の怒  
りも収まったかに見えた。そこでいとは、恐る恐る顔を上げて  
言った。

「英夫がまた、何かやらかしたんでしょか」

「こいつは将棋一つ、まともにできないんだ。だから、今日と  
いう今日は、性根しょうこんを叩き直してやろうと思うんだ！」

母は下げていた頭を上げると、口を閉ざしたまま、静かな目  
で父の顔を眺めている。勝藏は内心を量りかねてか、落ち着か  
ない様子で、いとと英夫の顔を見比べている。

「何か、何か言いたいことでもあるのか」

勝藏は吐き捨てるように言ったが、普段の威厳のこもった様子とは違う。それでも母は口を閉ざしている。

「言わないのか。言っつていいと俺が言っつているんだ！」

いとほためらっているようだった。英夫はかばってもらいたい反面、母が日頃抑えてきたことを口にして、父が激昂するのを恐れていた。母は英夫の方を向くと、正座姿で背筋をまっすぐしたま言った。

「英夫が間違っつたことをやっつたなら、厳しく叱っつてくださつて結構です。しかし、私には分らないんです。この子はあなたを恐れている。なぜだと思ひます？ それは自分が何をしても、あなたに叱られるからです」

「俺だつて、いつも怒つてるわけじゃない」

父はうつむくと、不機嫌そうな顔をしながら、入れ歯を噛みしめた。爪楊枝で掃除をすると、続けろと言うように、顎を上げて合図した。

「そうでしょうか。あなたは英夫に事あるごとにつらく当たつてらっしやる。それは英夫のためだつておっしやるんでしよう？ でも、私にはどうしてもそう思えないんです。あなたに叱られてばかりで、英夫はあなたの前でどう振る舞えばいいかも分からないんです。それでも、英夫のためだつておっしやるんですか。私はそうは思わない。あなたはご自分の気分が良くないから、この子につらく当たつてらっしやるだけなんです……」

勝藏は拳を握りしめていた。腕の震えが激しくなり、耐え

られなくなつて、力任せに蒲団を叩いた。次の瞬間、激痛が腕を走つて、勝藏は崩れるように前屈みに倒れた。いとが助け起こそうとすると、それを拒むように避け、痛みの走る腕で体を起こした。

「そうだ、おまえは、おまえはいつも正しい。どうして俺がこんなふうになつちまつたのか。リユーマチはな、俺の体ばかりか心まで蝕むしばんでしまつたんだ。そうだ、こんな父親、失格だよな。おまえらがかわいそうだよ。こんな俺は、こんな俺は、死んでしまつた方がいいんだ！」

父はあざ笑うように叫ぶと、泣きそうな顔をしながら笑い続けた。母は凍りついた姿で、正座したまま動けずにいた。英夫は居たたまれなくなつて、転ぶように家の外に飛び出していった。

隣家のラジオからは、「紀元は二千六百年」を祝う歌が聞こえてきた。英夫は自分の方こそ消えてしまいたくなつた。母がかばつてくれたことを喜ぶよりも、母が初めて父に口答えしたことへの驚きと、結果的に父の心が砕けてしまつたことへの悲しみの方が大きかつた。

父勝藏は数日後、体調が良いからと言って、吉野の本家がある伝法村に旅立つた。本当のところは、母との仲が気まづくなつたからか。それとも、体調のいいうちに、ふるさとの田畑と、大きな富士を目にしたかつたからかもしれない。新学期が始まつて間もなく、川崎の吉野家に勝藏の訃報ふほうが届いた。急性の心不全ということだった。

英夫は涙をためていた。生前の父は畏怖の対象でしかなかったのに、亡くなってはじめて、父の鬱屈した気持ちや、自身の仕事を継がせようとしていた思いが理解できた気がした。それは英夫自身が、貴志や美穂の父親になってからのことだったが。勝藏の言いなりに見えた母いとが、実は父以上に強い人間だったのは意外だった。あの頃、母は四十半ばになっており、すでに顔は日焼けして、目尻には細かい皺が寄っていた。現在と比べて、はるかに早く人々は老いていった。

母のイメージ、まだ英夫が幼児だった頃に見ていた記憶では、いととは色白で鼻や口は小ぶりだが、目はしっかり見開かれており、利発な感じはしても、可憐な娘らしさが残っていた。英夫

が風邪を引いた時など、おんぶして顔から下は羽織に包み込み、川崎大師駅近くの医院まで連れていってくれた。外は寒風が吹きすさんでいても、綿の入った羽織は、母の体温のおかげでぬくもりがあった。小走りで急ぐ振動は英夫の小さな体を揺さぶり、守られているのを肌で感じていた。

何でこんなこと、考えているんだろう。母の葬儀に出ているはずなのに、と英夫は思った。それとも、母が亡くなったのは、ずっと昔のことだったのか。八十半ばで死んだいとのは、ほとんど若返っていき、今では三十半ばに戻っていた。衣服だけは、晩年まで身につけていた紺の着物だったが。ただ、かつての母のイメージは、蠟燭の炎のように揺らいでいる。皺の消えた張りのある肌は、生きる喜びに震えている。引きずっていた

足も痛みがないらしく、こちらに向かつて微笑みかけているが、何を言っているのか、英夫にもよく聞こえない。

母さん、母さんと声をかけたが、いとは英夫の気持ち分かるらしく、しきりにうなずいている。近づこうとすると、いとは首を横に振る。前に進もうとしたが、母との距離は縮まらない。すでに英夫の体は、ようやく歩き始めた幼児だったからである。

いとはゆっくりと前に進んだ。すると前方に光の輪が現れ、揺らいだ影の一つ一つが人の姿に変わっていく。武士が支配していた時代の民のように、男も女も粗末な着物をまとい、手を上げては肩の辺りで左右に振り、盆踊りの円陣を組んでいるようだった。太鼓を叩いている者もないのに、手足の動きはち

やんとそろっている。母いとも人の輪に加わり、活動写真<sup>十五</sup>の上映を思わせる、音のないイメージの中の一人になった。不思議なことに、人々の円陣に近づこうとする幼児の自分を、英夫の魂が外側から眺めていた。

あれは何だろう、と英夫は思った。そうだ、あれはご先祖様の魂なんだと、心の中でつぶやいた。自分で問うたはずなのに、答えがこだまみたいに返ってきた。何で人々は輪を描いているのかな……。それは時間が永遠にめぐっているからさ。時間が永遠って、どういうことだろう……。動いてることと止まって

ることが同じってわけ？　もし時間が存在しないとしたら、と思つた時だ。人々の姿は光の輪と化したり、もとの姿に戻つたりを繰り返して、母の姿を見失いそうになつた。

俺は一体、何を見ているんだらう。母の死を悲しんでいたはずなのに、もしかして、死のうとしてしているのは……。英夫は踏み出そうとして、一瞬ためらいを感じた。このまま進んでいけば、妻の淑子や息子の貴志、娘の美穂とも別れなければならぬ。けれども、せつかく再会できた母とここで別れたら、もう永遠に出会えない気がした。母がご先祖様の魂に溶け込んでいったように、自分もその中に身を投じよう。恐ろしいと思つたのは、自分が存在すると思うからだ。それもすべて、宇宙という神が見ている夢なのかもしれない。

英夫の魂がそう思つた時、幼児の姿をした英夫は、人々の輪の中に駆け込み、まだ若い母いと腕の中に抱かれていた。甘い乳が口の中に入ってきた。願っていたことがかない、すべてが満たされた状態のまま、温かい膜の中に包まれていった。英夫という人間は、もはや存在しないことになつた。

\*

吉野英夫が敗血症のために危篤に陥つたのは、一週間ほど前のことだつた。二十世紀最大の彗星「ヘル・ボップ彗星」が、

地球に最接近した頃のことである<sup>十六</sup>。炎症を起こした股関節<sup>こかんせつ</sup>に、人工関節を埋め込む手術を受けるため、横浜市内の病院に入院したのだが、まさかそんな大事に至るとは、英夫自身も予想していなかった。

そこは東京湾に面した総合病院で、埋め立てられた海岸には人工の砂浜が敷かれ、対岸の島には水族館をはじめとするレジャー施設があった。自宅から遠いこの病院が選ばれたのは、専門の名医がいるという話を妻の淑子が聞きつけたこと、日帰りで遊びに来たついでに、充実した病院の施設を見学して、何か

\*十六 平成九年、西暦一九九七年のこと。

あった折にはぜひ世話になりたい、と本人が希望していたからだった。

人工関節を埋め込む手術は成功した。ところが、英夫は持病の糖尿病が悪化していたため、いつまでも傷口がふさがらない。体力が低下していたことで、耐性菌に感染してしまい、発熱が続くようになったのである。

意識レベルが低下したことにより、誤嚥性肺炎<sup>ごえんせい</sup>を防ぐという名目で、鼻からカテーテルを通して、胃へ栄養剤が流し込まれた。しかし、消化機能はすぐに働かなくなり、点滴でブドウ糖を血液に送り込むしかなかった。腎臓機能も不全に陥り、透析によって過剰な水分を抜いても、すぐに肺に水がたまってしまい、その繰り返しで心臓にも負担をかけていた。

医師は自発的な呼吸を止め、機械による人工呼吸に切り替えようと提案したが、ただでさえ苦しんできた父の肉体を、メスで傷つけることは忍びないというのが、息子貴志の意見だった。娘の美穂は一日でも長く、父に生き続けてほしいと願ったが、喉の切開が必要だという説明を聞くと、兄の意見に従わざるを得なかった。妻の淑子は、病院への泊まり込みが続いて、過労のために体調を崩していた。子供たちの考えに異存はないとのこと、延命治療は一切行わないことになった。

危篤に陥る十日ほど前から、英夫はずっと眠り続けていた。ただ、夢でも見ているようで、閉じた瞼の下で眼球が動いたり、時折薄目を開けて、天井の方をぼんやり眺めているので、意識が戻ったと思つて、美穂が声をかけてみても反応はない。昏睡こんすい状態とは断定できないが、とても会話ができる状態ではなかった。

病室には最上階の個室が当てられていた。最後のひとときを家族だけで過ごせるように、という病院側の配慮だった。この施設を選んだのは間違ひではなかった。平日の昼間は淑子が病床に寄り添い、泊まり込みは美穂が行うようになった。

週末は貴志が付き添うことになった。意識が戻らない父の傍かたわららで何時間も過ごすのは、正直に言うところだった。それより見ていられなかったのは、英夫が痰たんを詰まらせて苦しんでいる姿だった。すぐにナースステーションに看護婦を呼びに行くと、苦しむ喉にチューブを差し入れ、空気圧で吸い出すのだが、栄養失調で血管が傷つきやすくなっているので、痰の中にしばし

ば血が混入する。

西日が射す頃になると、決まって発熱するので、氷枕をしなければならぬ。ベッドの横には患者のために簞笥があつて、洗面道具や着替えの下着が入れてあつた。貴志は簞笥の上に、携帯用のカセット・プレーヤーを置いた。音楽が右脳を刺激することで、リラックス効果を与えるとともに、神経細胞の再生を促す働きがあると、雑誌が何かで読んだことがあつたからだった。

父に聞かせようと選んだのは、「星に願いを」When You Wish upon a Star だった。ディズニーのアニメ映画「ピノキオ」の主題歌で、星に願いをかける時、心を込めて望むなら願いはきつとかなうという内容で、歌詞は吹き込まれていなかったが、子

どもの頃を思い出させるメロディーだった。父が回復するかどうかは考えたくなかった。ただ、苦しみを少しでも和らげてあげたい。夢見るような旋律が流れ出すと、酸素マスクをつけた表情が和らいだように見えた。

貴志は父の左手に触れてみた。温かい。ペン胼<sup>だこ</sup>胝の出来ている右手と違って、こちらの手は色つやが良かった。爪の色も淡いピンク色をしている。貴志は掌で父の左手を包み、指の間に自分の右手を差し入れた。そつと握ってみる。すると、父の左手は握り返してきた。眠ったままのように見えても、父は目覚めていて、こちらの存在に気づいてくれていたのか。貴志が覗き込むと、うつすらと開かれた英夫の眼から涙があふれていた。

翌日の早朝、病院から電話がかかってきた。父英夫が死亡したという知らせだった。貴志は信じられなかった。握り返した母淑子の話では、酸素マスクをはじめ、腕につないだ点滴のチューブなども外れていたそうだ。深夜の見回りの合間に、父が無意識で外したらしく、発見が遅れたために、心臓マッサージなども功を奏さなかったとのことだった。

お昼前に一家が到着した時、英夫の遺体はすでに、霊安室に移されていた。といつても、陰気な印象はまったくくない……。大きな窓ガラスの向こうには、青い海にヨットが浮かんでいた。打ち寄せるさざ波の音は、ここからは聞こえない。外界と隔てられているものの、高級なりゾートホテルの一室のようだった。

天井の一部がガラス張りになっていて、陽の光が部屋全体に降り注いでいた。ガラス越しに晴れ上がった春の空を、悠々と動いていく雲の動きも見取れた。まるで屋外で太陽の恩恵を受けているようだった。

ベッドの父の顔には、白い布はかけられていなかった。息は引き取ったものの、病院にいる間は人間として扱い、快適な時を過ごせるようにという心遣いからだった。光に包まれているのを、全身で感じられるように。

英夫には苦しんだ様子は見られなかった。一人の人間が生を終えて、命の火が消えたという感じで、苦痛に耐えた緊張から解き放たれ、幸せに浸されているようだった。光を浴びている姿は神々しく感じられ、父を亡くした悲しみよりも、父の周り

に漂う安らぎに、貴志も美穂も満たされていたのだった。ただ、母の淑子だけは、ハンカチで涙を拭きながら、通夜や葬儀の日取りや段取りに頭を悩ましていた。

貴志が一向に涙を流さないのも、美穂は不審に思っただけか。

「お兄ちゃんは悲しくないの？」

「お父さんの顔、おまえはよく見ていないだろ」

二人の会話に、我に返ったのか、淑子はベッドの傍らに近寄った。もはや動くことのない顔を、味わうように眺めている。

「両手を曲げて、胸の前で合わせてる。これって、赤ちゃんがお腹の中に入ってる時の姿だわ」

母の指摘によって、貴志は父が生まれる以前の世界に戻って

いった気がした。存在する以前の、苦しみも何もない世界へと。きつとおばあちゃんのお腹の中で守られていた世界へと。

そこには海がある。生命の源である海が。人は死ぬと帰っていくのだ。祖母いとも、またその母、ときの海に戻っていった

……

あとがき

時間という観点から、小説を二種類に分けた場合、現在進行中の話と、過去を回想する話になるが。ダイナミックな展開で読み手を引きつけるのは前者である。一方、詩的なイメージや思索的な内容は、回想する者の目が感じられるため、静的な印象を与える。作品の価値という点では、必ずしも後者が劣るわけではないが。

ステイーヴンソンが作品の欠点を指摘すると、素人の書き手は実際にあったことだから、と弁解したという逸話を、木村毅が『小説研究十六講』の中で紹介している。实在の人物をモデルにする場合、内容は現実の裏付けがあるために、生き生きと

描けたと思ってしまうがちだが、それは実際の文章から得た印象でなく、書き手自身が体験したことを記憶しているからである。また、素材の事実を偏重するあまり、作品としてはいびつな筋書きとなっても、それに気づかないこともある。

書き手が自伝的な内容を書く難しさがそこにある。客観的に扱うことが容易ではないのである。その弊害を少しでも減らすと、登場人物にはモデルとは異なる名前をつけ、舞台設定や年代をずらしたりする。それはモデルとなった人物のプライバシーを保護するよりも、素材からの束縛から自由になりたいという意図からされることなのである。

描かれる内容を熟知していると、書き手は細かな描写が煩わしくなり、突飛な展開を簡潔な文章で済ましてしまったりする。

読み手はより多くの想像力で、不十分な描写を補完しなければならなくなる。芥川龍之介の「歯車」などは、死を直前に控えた者が放つ鬼気迫る雰囲気が、そうした欠点を感じさせなくしているが、読み手には決して読みやすく書かれてはいないのである。

今回「海に帰る日」として描いたモデルは、言うまでもなく、僕の父から見た祖母の姿である。ただし、そのまま時間の流れに沿って書くのでは、余りに単純な作りになってしまうので、祖母の死を見つめる父の目が、実は過去を回想していたのだというトリックを仕掛けた。途中から父の記憶が、時間を遡行して展開していくのが、それを暗示しているように書いたつもりである。

時間の遡行というスタイルは、キューバの作家カルペンティエールの「種への旅」からヒントを得たが、父の亡くなった姿が、胎児の姿を連想させたという印象が元になっている。祖母が亡くなったのは、昭和五三年（一九七八）で父が亡くなったのが平成九年（一九九七）だから、描かれた時代の描写がピンと来なかったかもしれない。多摩川の堤防の外側に、在日朝鮮人の小屋が建っていたり、東海道本線のトイレに入ると、便器から線路が見えて、走りながら糞便をまき散らしていたというのも事実である。

この作品のテーマは何かと問われれば、老いと死をいかに受け容れるかということである。僕自身も人生の三分の二は生きてしまったわけだから、遠からぬ日に直面する問題である。

二〇一四年四月五日

高野敦志